

令和4・5年度 神奈川県立学校 第三者評価実施報告書

評価実施校	鎌倉高等学校	課題解決に向けた取組状況への評価・助言 ＜評価委員＞	課題解決に向けた取組の成果と課題 ＜実施校＞
カテゴリー名	学力向上進学重点校エントリー校	総括評価(これまでの訪問①～⑤を踏まえた課題解決の取組状況に係る評価) ＜評価委員＞	総括評価を踏まえた次年度の学校運営に係る改善点および改善方法 ＜実施校＞
課題 1	指導要領の趣旨を理解した着実な学習活動の展開 ・ 教員が、日常において学習指導要領の趣旨を理解した着実な学習活動を展開する必要がある。	冒頭に触れておかなければならないことは、2年間の評価期間中に当校の評価指標の大幅な見直しが行われたことである。再設定された評価指標は、「学校(教員)の取組」を「生徒の受け止め方(反応)」で評価するという基本姿勢を堅持し、客観性や信頼性の観点をより重視する方向で設定されたものと受け止めた。 授業改善の指標とされた生徒による授業評価の質問項目6については、目安として設定された50%を超えている教科などが7月の時点で6つだったことに対して、12月の時点では8つに増加した。また、50%に届かない教科なども含め7月から12月にかけて数値の上昇が認められた教科などが、11教科中9教科(80%強)あった。中には、10ポイントを超える上昇を示した教科などもあり、教員が生徒による授業評価の結果を真摯に受け止め、短期間の中で授業改善に取り組み始めたことがうかがえる。このことは、生徒による授業評価の結果を検討した教科会の記録からも十分に読み取れることである。このような取り組みの姿は、カリキュラム・マネジメントのPDCAサイクルにおけるC-Aプロセスの実質化・機能化と言い換えることができ、本校の取組における顕著な成果と位置付けられるように思われた。今後は、生徒による授業評価の他の質問項目にも分析の目を向けることや、50%に達していない教科などの課題を確認して、改善に向けていくことを期待したい。また、本評価指標とは別に、本校の授業改善のテーマである「クリティカル・シンキング(批判的思考力)の育成」は、生徒の能力面からの評価として大変重要である。この力の育成状況の評価について、高校段階における具体案の提案まで、是非取り組みを進めていきたい。 生徒による授業評価の結果によると、おおむね全ての教科について、項目6「授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題解決の方法を考えたりすることができた」の肯定的な回答率が、7月実施時よりも12月実施時では高いことが顕著である。このような結果について、クリティカル・シンキングを基礎とした論理的思考の育成をめざした授業改善の組織的な取組の成果が、如実に現れ始めてきたものと理解する。今後、各教科におけるクリティカル・シンキングの育成の積み重ねが、探究学習にどのように生かされているかを検証するなど、その実態の把握に向けて取り組まれない。	＜成果＞ 生徒による授業評価の質問項目6に係る授業改善のため、教科会での話し合いの機会を設け、また、教科で話し合われた内容を全教職員で共有したことにより、授業に関するコミュニケーションが教科を超えて、教職員間で図られることが多くなり、授業にも一定程度成果を反映させられた。 公開研究授業での授業者を各教科2名とし、高校教育課や総合教育センターから指導主事を派遣していただいたことで協議が活性化するなど、2年目は、組織的な授業改善の推進が図られ、指標の達成につながったと考えられる。これは、一人ひとりの教職員の授業改善への意識の向上の表れと考える。学習指導要領の内容をもとに身に付けさせたい力を教職員間で共有し、「主体的で対話的で深い学び」を実現させるための手法を適切に取り入れ、「生徒の主体的な学び」を重視する風土が醸成されていることが大きな成果である。 当校において、授業改善の取組は学習企画グループが、生徒による授業評価については教務グループが所掌している。今回の授業改善の取組は、両グループが連携して、協力し、推し進めることができたために、目標達成ができたと考えられる。
R5 指標	1. 教科を中心にして良い取組や新しい取組を共有し、また、課題を把握して解決に向けて協議するなどして、組織的な授業改善に取り組む。生徒による授業評価①において「根拠をもとに考えをまとめる力」に関する項目6②について、評価4「かなりあてはまる」が50%以上。 注1 「生徒による授業評価」…各学校における教員の指導力の向上や授業の改善を図るとともに、生徒自らが学習への取組を見つめ直す機会とするため、授業に関する評価を行うもの。 注2 「生徒による授業評価 項目6」…「授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題解決の方法を考えたりすることができた」	＜課題＞ 「クリティカルシンキングを基礎とした論理的思考の育成」をテーマとして2年間行った授業改善については、共通したビジョンをもったものとしては不十分であった。今後は、「クリティカルシンキング」の定義やその育成状況を図る評価方法などを明確に示し、生徒観を教職員間で十分共有したうえで、各教科での取組の方針や内容、計画などを全教職員に提示し、組織的に授業改善を進めていくこととする。また、スーパーサイエンスハイスクール(S S H)の申請や今後に向け、3年間通して行う探究活動と他教科の授業との連携を全教職員で意識し、一丸となって取り組んでいくことが必要である。 「主体的・対話的で深い学び」を実現する手法の一つの所謂アクティブ・ラーニングについて、生徒間での情報の共有や教え合いを超えた「深い学び」に至る活動としていくために、来年度以降、授業改善の視点の一つに加えるなどの工夫を図る。	＜成果＞ 生徒から愛校心を感じる事が多い当校において、次の進路も同じく、誇りに思えるところを選び、目標達成に向けて努力してほしいという理念からスタートして進路支援に当たった。「本当に行きたい大学を第一志望とし、そこを目指して努力するという経験を通じて生徒自身の成長を促す」という指導方針を定めて、教職員全体への情報提供の機会やあり方を検討し整備した。 当校の進路支援についての理念や考えは生徒及び保護者にも浸透し、国公立大学への受験者数は一般選抜、学校推薦型選抜、総合型選抜のいずれの選抜方式でも増加し、全体の合格者数も増加した。進路希望の実現に向けた取組が理解された証であると捉えることができる。 また、「第一志望を貫く」という共通意識のもとに、各学年における進路集会や進路指導を積み重ねるなど、進路支援の取組の充実とともに、生徒の学習意欲の高まりも大いに感じ取ることができた。 進路指導上の内容を含め、教職員は、令和5年度から拡充されたSCやSSWとの相談、連携を図った。
課題 2	学習活動と進路指導を結び付けることによる生徒の進路希望の実現 ・ 上記の取組を進路指導と結び付け、生徒の進路希望の実現を果たすことができるようにする必要がある。	進路指導に関しては、ともすると進学先大学や合格者人数にとらわれがちになることを乗り越え、「生徒(や保護者)の意識」に取組の方向性を見定め、「第一志望宣言」を貫く指導を推し進めた。この取組の機能化に向けては、生徒本人はもとより保護者とも情報の共有や意志疎通を進めたことがあげられる。この取組は1年次から継続的に、かつ時間をかけて行われており、このような地道な取組が生徒や保護者の進路に対する満足感に繋がっていると考えられる。 今後に向けた取組の課題としては、以下の2点があげられるだろう。①当校が発刊している進路通信の紙面内容の工夫(特に、スーパーグローバル大学(トップ型)に関わる情報提供に関わって)。一例として、新たな試みとしてのサイエンスカフェの開催にあわせて、その記事などを紙面に加えていくことなど。②すべての生徒が第一志望を貫くことが叶わない実態がある現実を踏まえて、生徒の教育相談、進路相談に関する学校としての体制を今年度検討すること。特にメンタルヘルスに関するサポート体制については、SCやSSWなど専門職との連携のあり方に及んで検討していくこと。これらに関する取組を期待したい。 一年次から進路集会を開催し、生徒自らが設定した目標をあきらめることのないように、継続的に目標達成に対する意識を喚起させるように促していた。生徒が目標を見失わないように鼓舞する機会を定期的に開催する取組は、今後も継続していただきたい。 キャリア教育の一環として実施している、社会人と生徒との交流機会を設定する取組に際して、なるべく若手の職人や卒業生の中から人選したり、来年度以降、研究者の講話を聴くサイエンス・カフェにおいても、若手の研究者に本校してもらう意向を提示したりするなど、生徒のキャリア形成に資するような工夫が、各所で施されている。今後、学校運営協議会の「キャリア部会」と連携・協力をしながら進めていくとの意向はないか。 来年度から業者テストのデータを活用し、生徒に個別対応する取組を実施していくとの意向を伺った。一層、進路指導が充実することを期待する。	＜課題＞ 進路実現に関連して生じる悩みの一因に、いわゆる偏差値に拘泥し自己肯定感が低下することが挙げられる。第一志望を偏差値で選ぶのではなく、自分の興味・関心の先を、そして学問をするための環境から選択することができるように、1学年からの指導を行うことを充実させたい。 令和5年度から導入された「かながわ子どもサポートドック」も活用し、教職員が、SCやSSWも含めて当校の教育相談との連携をより深く、一層早期対応に取り組んでいくことが必要である。 生徒が大学での学びを見据えて、自分の興味・関心のある分野を探究し、学習を進めるために、当校での探究活動は進路に関わる重要な取組となる。全教職員が一丸となって探究活動の指導に当たることが今後の発展に必要と考える。サイエンスカフェの取組は大変有用で、一層効果的な取組となるように人選などの段階から、所掌する学習企画グループ、キャリア支援グループで連携し、教職員全体で情報共有して進める仕組みを構築していく。
R5 指標	2. 学習指導、生活支援、活動支援(部活動・行事・生徒会等)の視点ですべての職員が連携して、「第一志望を貫く」進路支援を行う。2年生1月に実施する「第一志望宣言」から変更なく受験できた生徒が80%以上。	本評価期間において、設定された課題や指標に対する具体的な取組が進められ、一定の改善が図られたことが確認できた。特に2年次は、当校がめざすべき方向性を教職員間でしっかりと共有し、学校全体で取組を進めようとする実態を確認できたことは、評価において特筆すべきことである。質の高い教育活動の提供と、その先にある生徒の進路実現の可能性の向上は、継続的な取組事項と位置づけていたが、次年度以降も改善と発展を目指して進めていただくことを期待したい。 また当校は、SSHの申請が視野に入っていることから、現在のような授業改善の取組にとどまらない、新たなカリキュラムや新たな授業の創造が期待される。すなわち、当校が持つ良き文化・伝統を継承しながら、次代を担う人材の育成に向けて、これまでにないような学校づくりや授業づくりが求められるということである。本評価を一つの試金石のようにとらえていただきながら、新たなステージに向けて様々なチャレンジを進めていただきたい。 学校全体がチームとなって前進しようとする姿勢が、管理職や教員へのヒアリング、各種のデータ資料、学校運営協議会の議事録などによって、確認された。コロナ感染症対策が軽減化され、教育活動をよりアクティブに実施できるようになったことや、教職員にとって他校への学校訪問や遠方への調査研究活動が可能となったこととあいまって、学校全体がSSHの指定に向けて、一層活性化することを期待したい。	＜成果＞ 学力向上進学重点校エントリー校として、生徒の進路希望の実現のためには、生徒が自ら考え、主体的に行動できること、学習支援、進路支援、生活支援の視点から授業、HR、学校行事、部活動などあらゆる場面で全教職員が協力してチームとして支援するということが重要である。この2年間、当校では授業改善と、進路支援の2つの課題について、企画会議を中心として、改善案を立てて、グループや学年において、総括教諭から教職員へと説明や支援をすることによって、着実に成果を上げることができた。 今後は探究活動の充実やSSHの申請に向けて、授業改善を始め教育相談などの取組も含め、一層校内、校外の連携を図り、資源を活用して取り組み、教育活動を推進することが必要となる。一つ一つの取組について目的を明確に示し、教職員の共通理解を積み上げて、伝統・文化を継承しつつも前例踏襲を乗り越えてチャレンジする気風を生徒・教職員間に醸成していきたい。 特に、令和5年度は授業改善において、他校の優秀授業実践教員の授業を10名以上が見学するとともに、SSHの取組についても他県の2校を訪問し授業見学も行った。今後は、優れた授業者から学んだ取組などをどのように生かし、授業や生徒がどのように変容したかということを報告し、共有することも授業改善の仕組みに組み込み、組織的な授業改善を推進していく。